北大邦楽会と上田流美登里会の誕生

中島聖山

都山流および琴古流の鈴慕会・竹友社の北海道における創成期の状況と北海道大学邦楽部のルーツについて6回にわたって触れてきたが、今回は北海道大学邦楽部のその後の様子と、上田流の北海道進出について述べてみることにする。

上田流の北海道進出に関しては、特に北海道の上田流の産みの親とも言うべき、青山呂憧と上田流宗家、上田芳憧の来道について焦点を当て話を展開してみる。

北海道大学邦楽部の誕生

北海道大学における邦楽愛好会の歴史は、明治35年10月の松村松年教授の尺八演奏に始まる。ドイツ留学から帰国した松村博士は、学内の演奏会で尺八を演奏したが、上手に吹けなかったとみえ、聴いていた学生から悪評をかった。これに奮起した教授は、その後命懸けの稽古を重ね、「尺八博士」の異名を取るまでになった。尺八と言えば三曲合奏になくてはならない楽器なだけに、尺八音楽にとって箏、三絃との合奏も重要な要素である。教授は合奏力をつけるため地元の糸方や山田流箏曲をたしなむ妻との合奏練習に力を注いだ。こうした稽古を積み重ねるなかで、松村松年教授の邦楽仲間は次第に増え、北大千鳥会の結成につながっていった。

結成当時の北大千鳥会は、邦楽をたしなむものであればジャンルに関係なく誰もが参加できる自由なグループで、メンバーのなかには地唄のみならず、長唄や謡曲等の愛好家も加わり、一緒に楽しんでいた。だから会主の松村松年教授と師弟関係にある者の集まりではなく、あくまでも互いに学内の邦楽愛好家が寄り集まって、年1～2回の演奏会をする程度のものだった。

会主の松村松年教授が琴古流をたしなんでいたことや、札幌に都山流の師匠がいなかったことなどから、北大千鳥会の尺八メンバーは、ほとんど琴古流だった。松村松年教授の尺八に対する情熱は誰にも負けないものであったが、彼は常にアマチュアの領分をわきまえ、川瀬順輔をはじめ東京で活躍していた各派のプロ尺八家と親交を深めながら、自己研鑽の目標を失わないよう努めていた。

琴古流竹友社の専門師匠として斉藤玉洞が来札し、本格的な活動を展開しはじめたことにより、琴古流竹友社に所属する学生たちで組織する北大八千代会が結成された。北大八千代会は北大千鳥会と違って尺八愛好家のみの集まりであり、同流同派の学生たちによって構成されていた。これが北大における尺八愛好会の始まりである。

大正9年1月27日に開催した北大八千代会の演奏会は、翌日の新聞に大きく取り上げられた。また、斉藤玉洞主宰の玉声会と北大八千代会との合同演奏会も企画され、大正15年5月22日と23日の両日にわたって開催された演奏会には、はるばる東京から川瀬順輔と川瀬里子が来札し、演奏会に華を添えた。

北大康琳会の誕生

北大における都山流の始まりは、入学前に出身地の神戸で畑中康山に師事していた中野長俊が、入学後も独学で吹きつづけたことによる。活動家だった中野長俊は同級の村田柳一に手ほどきし、大正6年4月頃から二人で都山流尺八を吹きまくっていた。

大正9年1月に行われた、畑中康山や流祖中尾都山を招いての第2回篁会の演奏会が大成功に終わったことや、その後畑中康山が札幌に定住し、都山流尺八の専門師匠として流人の育成に専念したことなどにより、都山流は飛躍的に流勢を拡大した。大正9年3月に中野長俊や島谷柳一は卒業したが、新曲を得意とする都山流の流風は若い学生たちの心を良く捕らえ、急速に普及した。北大康琳会は学生たちの尺八愛好会のなかでも、最も規模の大きな組織となり、札幌康琳会等と一緒になって積極的に演奏活動を展開した。

北大康琳会は大正9年1月に行われた第2回篁会の演奏会が、事実上は中野長俊と島谷柳一の卒業記念送別演奏会だったことを踏まえ、その後も毎年1月に卒業生送別の演奏会を実施してきた。

北大康琳会送別演奏会

北大邦楽会の開催

このように、北大の学生たちのあいだには尺八が流行し、各流派が競い合って音楽活動を展開していた。当時の学生たちは、各自先生について稽古を続けながら、学内で尺八愛好会の活動をしていた。琴古流鈴慕会の北大鈴韻会や琴古流竹友社の北大八千代会、都山流の北大康琳会、上田流の北大美登里会等がそれである。従って学内各愛好会の優劣は、各流派の優劣につながることでもあり、そうした意味からも各流派の師匠たちは、北大の尺八愛好会の充実強化に力を注いだ。

学内の気運が高まった大正13年11月30日、北大中央講堂で第1回北大邦楽大会

北大春季邦楽大会

北大文武会第１回発表会

が開催された。演奏曲は三曲合奏を中心に古典本曲独奏や長唄など全15曲だった。演目と演奏者については、前号で詳しく述べたので今回は省略するが、出演者は一年半後に行われた第2回春季大会の様子から、およそ30名と推測できる。

高橋空山の古典本曲「阿字観」の独奏で締めくくられた第1回北大邦楽大会は、各流派の支援や地元糸方の賛助出演により市民１４００人を集める盛況となった。勢いづいた学生たちは、その後毎年春秋2回邦楽大会を開催する計画を立てたが、残念ながら大正14年には開催されず、第2回北大邦楽大会は大正15年春に、北大中央講堂で開催された。

定期演奏会の開催により学内の活動が定着してくると、糸方の協力体制も次第に整い、三曲合奏の環境が作り上げられた。それとともに邦楽愛好家が集って実施していた北大邦楽大会は発展的に解消し、北大文武会邦楽部として新たに組織化された。そして、昭和3年11月10日には、糸方に菊茂社中の賛助出演を得て、第1回発表会が開催された。学生の出演者は40名にのぼり、以前よりさらに充実した演奏会となった。

上田流の創流

上田流の創始者である上田芳憧は、明治25年9月26日に大阪の履物商である上田直一の長男として生まれ、本名を喜一といった。父の尺八を聞いて育った上田芳憧は、8才の頃から尺八を手にするようになった。明治40年に初代中尾都山の門人となり、同43年には准師範に昇格して上田佳山と名乗った。

初代中尾都山の代稽古を務めるほどの技量を有していた上田佳山は、入門後8年目の大正3年に師範と竹琳軒の冠称を許された。創作意欲に燃えていた上田佳山は、尺八二部合奏曲「水の行方」と尺八独奏曲「五月雨」を作曲し、大阪中の島公会堂で行われた慈善演奏会で演奏した。こうした上田佳山の積極的な創作活動が当時の都山流幹部のなかで批判されることとなり、宗家の代稽古までした上田佳山が惜しくも大正6年3月19日に退門届けを出す結果となった。

自ら進むべき道を選択した上田佳山は大正6年3月25日、大阪市北区西寿町の冷雲寺に門人を集め、上田流の創設を宣言した。上田流創設と同時に芳眼と改名したが、その後芳憧を名乗るようになった。

大正6年11月25日に、大阪近松座で上田流創設記念連合大会と称する演奏会を開催し、名実共に上田流の存在を世に発表した。

上田芳憧の弟である上田竹憧が作曲に力を入れ、早くから長唄の手付けをしていたことから、上田流の尺八音楽には長唄系の曲が多い。

青山呂憧の来札

大阪を中心とした上田流の創始によって、北海道においても都山流から上田流への転門の動きがあった。

佐伯才一は広島の商家の息子だった。姉が箏曲を演奏していたことから、才一も中学時代から尺八を吹き始めた。当時の広島は、島原帆山を中心とした都山流の地盤が厚いところだった。才一は都山流の師匠について勉強した。農学を志した佐伯才一は、遠く海を渡って、北海道大学農学部に入学した。彼が入学した大正後期は学生たちによる邦楽の演奏活動が最も盛んな頃であり、彼もすぐに邦楽愛好会に入った。当時は琴古流竹友社と都山流の畑中康山に師事している学生が主勢力となり、精力的に活動を展開していた。そのため佐伯才一も当初は都山流の仲間たちに混じって尺八を吹いていた。

しかし、その後彼は上田流に転門する事を決め、すでに札幌に来ていた上田竹童の門人の久慈寛憧に師事しようとしたが、意に合わず断念した。

北海道における上田流の将来を考えた佐伯才一は、直接大阪の上田流宗家（上田芳憧）に連絡を取り、上田流師匠の札幌派遣を嘆願したのである。大正6年に都山流から分派していくばくもない上田流は、大阪を中心に関西方面で勢力を伸ばしていた。大正11年には２２２人の師匠が、全国各地で上田流尺八道の普及に努めていたが、残念ながら東京以北には上田流を教える者が誰もいなかった。

佐伯才一から師匠派遣の依頼を受けた上田芳憧ではあったが、北海道は全く地盤のない土地だけに勢力拡大の新開地としての魅力はあっても、生活のことを考えると不安があったに違いない。考えた末、上田芳憧は師匠になったばかりの青山呂憧の派遣を決意した。大正12年の春のことである。

青山呂憧は大正10年1月15日に大阪中央講堂で行われた第2回楽典講習会に参加しているが、憧号はついていない。また大正10年12月の上田流幹部名簿にも名を連ねていないことから、彼が師匠の資格を取ったのは、大正11年から渡道する大正12年春までの間ということになる。

師匠になったばかりの彼が、生活の保証もないまま故郷を遠く離れた北海道への移住を決意したのであるから、上田流の普及と芸道の追求に対する彼の一念は、想像を絶するものがあったろう。

大正12年春、来札した青山呂憧はすぐに「美登里会」を結成し、活動を開始した。高い理想に支えられた青山呂憧の芸術感は、多くの尺八愛好家の心を捕らえ、「美登里会」の発展へとつながって行った。アマチュアといいながらも、彼の尺八道に対する真剣な態度は、他のプロ尺八家達に勝るとも劣らぬものだった。彼は自分の芸術感について、昭和11年発行の「芸術クラブ」に投稿しているので概略を紹介する。

『芸術家は清節を守り赤貧のなかにも芸術に対して忠実なる努力をしなければならないし、そうすることにより芸術的気品が生まれ真の崇厳な芸術が生まれる』と芸術に対する持論を披露する一方、人間としての生きざまにも触れ、『芸術に真剣なる人は人生についても真剣であり、反対に芸術に怠惰なる人は、また人生に於いても流されて生きている』と言いきっている。

上田芳憧の来札

青山呂憧が佐伯才一の依頼で来札して2年半後、大正14年12月には大阪より上田流宗家を招いて、上田流尺八を披露する大演奏会が開催された。

大正14年12月11日と12日の2日間にわたって行われた演奏会は大成功に終わり、初日は約500名の入場者を数えた。

上田流の特色を出し切ったとも言えるその演奏会は、長唄や日本舞踊の入った大がかりな舞台装置を使用し、演出を凝らした新しい形態の演奏会だった。大阪からは宗家上田芳憧をはじめ、生田流箏曲の菊岸大勾当が来札した。菊岸大勾当は地元尺八家との合奏練習のため早くから札幌入りし、上田芳憧も7月6日には来札して、演奏会に向けての総練習に入った。

地元の経済界、邦楽会はともに協力を惜しまず、会の成功に一役買った。地崎宇三郎を代表とする地崎組が後援となり、糸方では山田流の笹島花井、原松寿、生田流の友広勾当、長唄の鳥羽屋三十郎、清元の感元延志葉、鳴物の八住小吉・堅田喜三代らが賛助出演した。また日本舞踊では藤間寿々衛が出演し、会に華を添えた。

尺八は青山呂憧を始め桑島呂昭・上林呂吃・竹山呂惇・佐伯呂怯・水上呂白・作田呂成・遠谷呂峰・亀井呂城・高橋呂洲・高井呂葉・岩瀬呂濤・清水呂鳳・中野呂声・本郷呂静・友広呂仙・山本呂狗・秋山呂亘・大平呂観・原口呂星・二瓶呂創・堀向呂渉ら22名が出演した。来札以来、わずか2年半でこれだけの門人を育成し、上田流尺八を普及させた業績は大きく、後の上田流の発展に大きく貢献することとなった。

プログラムは2日間とも長唄で始まり、中間で尺八独奏そして舞踊で終わる形を取った。初日、宗家上田芳憧は「田舎砧」を青山呂憧と合奏し、「五月雨」を独奏した。また2日目は秘曲「松風」を青山呂憧と合奏し、「岩清水」を独奏した。

7月11日

1、長唄・巽八景
2、越後獅子
3、長唄舞踊・岸の柳
4、郭公
5、清元・造　菊睦言
6、雲雀の曲
7、長唄・夢
8、さむしろ
9、長唄・俄獅子
10、月の流
11、里の暁
12、長唄・勧進帳
13、松風
14、田舎砧
15、長唄舞踊・鶴亀
16、清元・玉川
17、五月雨
18、桜狩
19、長唄・秋の色種
20、明治松竹梅
21、舞踊・藤娘
22、八重衣
23、舞踊・山姥

7月12日

1、長唄・小鍛冶
2、茶の湯音頭
3、舞踊・松の緑
4、近江八景
5、清元・造　菊睦言
6、名所土産
7、長唄・連獅子
8、野辺の錦
9、長唄・元禄花見踊
10、水の行方
11、春重ね
12、長唄・助六
13、臼の声
14、松風
15、長唄舞踊・鶴亀
16、舞踊・山姥
17、岩清水
18、笹の露
19、長唄・吾妻八景
20、青柳
21、舞踊・藤娘
22、須磨の嵐
23、舞踊・六玉川

上田流10周年記念演奏会

大正14年7月に札幌劇場で開催した、宗家上田芳憧を招いての演奏会の成功は、上田流の存在を明確にするとともに、その後の流勢拡大に大きな影響を与えることとなった。

プログラム表紙

都山流から分派した上田流にとって、全国規模の確固たる組織作りは悲願であり、それだけに北海道開拓に対する期待は大きかったに違いない。全くの無勢力地帯だった北海道に師匠を派遣して、僅か2年半で20名以上の流人を抱えるまでになったのであるから、流本部の期待も増したであろう。

上田芳憧を招いての大演奏会の翌年は、都山流創始30周年の記念の年であった。都山流は大正15年2月14日に、東京の帝国劇場で30周年記念大演奏会を開催したのをはじめとし、全国各地で記念の演奏会を開催した。

これを受けて北海道でも、大正15年3月20日に康琳会が旭川の商業会議所で30年を祝う記念演奏会を開催した。地元の伊藤彩山が中心となり、札幌から畑中康山を招いての演奏会だった。

旭川で都山流創始30周年記念の演奏会が行われた大正15年3月20日、札幌では上田流創始10周年記念演奏会が行われていた。札幌帝国館で青山呂憧の司会で開催された上田流10周年祝賀記念演奏会は、糸方に遠藤操琴を招いての盛大なものだった。

上田流の創始は大正6年3月であるから、正確には昭和2年が10周年である。その証拠に、昭和2年には上田流本部主催の記念演奏会は行われなかったものの、上田流創始10周年を祝う記念の演奏会が阪神方面で開催されている。昭和2年4月10日に京都市で行われた章友会の演奏会や、同年5月15日に神戸で行われた歌友会がそれである。歌友会の演奏会には宗家上田芳憧が出演している。

なぜ1年繰り上げて上田流創始10周年の記念演奏会を札幌で開催しなければならなかったのだろうか。しかも、都山流創始30周年の記念演奏会が行われる日にである。推論の域を出ないが、そこに上田流の流勢拡大に対する気迫と、流人一丸となって上田流の存在を北の大地に根づかせようとする意気込みを感じないではいられない。

青山呂憧の精力的な努力によって、上田流は着実に流勢を拡大し、毎年定期的に演奏会を開催するまでに発展した。また札幌支部を設置して、地方への進出にも力を注いだ。作田呂恍を中心とした帯広美登里会や山口呂勝を中心とする追分美登里会がそれである。

帯広美登里会は昭和4年4月6日、帯広の栄楽座で札幌から青山呂憧を招いて、最初の演奏会を開催した。また同年7月29日には追分の都座でも追分支部美登里会の演奏会が行われた。

こうして上田流は、大正12年春に青山呂憧が来札して以来、未開の地だった北海道に大きな足跡を残し、現在の上田流の基盤を作ったのである。